

令和7年度 能美市立和氣小学校 学校経営具現化に向けた学校評価表

項目	具体的方策	主担当	【評価指標】 〈成果指標〉 〈努力指標〉 〈満足度指標〉	【評価の根拠】 達成度判断基準	評価	前期評価からの 分析と考察	今後の改善策	学校運営協議会での 懸念内容
1	【組織的・協働的な教育活動】 主任を中心とした各部会を機能させ、組織的・協働的に教育活動を進める。	教頭	【努力指標】 主年会で運営方針を確認し、各部における担当分掌について、ロードマップで検証することで、取組の見直しが行われている。	【教師アンケート】 「自分の担当分掌について、ロードマップで検証し、適切な取組となるよう見直しを行った」と肯定的に回答する教師の割合が A: 80%以上 B: 70%以上 C: 60%以上 D: 60%未満	A 100%	各主任が、担当する校務分掌を部会で見通しをもって計画立案しながら、各担当の責任を明確して確実に教育活動が進められている。運営委員会で方向性を確認し、ベクトルを合わせて組織的・協働的な体制が機能している。	各主任の参画意識が高く、職員が一丸となって教育活動にあたっている。これからも、学校の児童の実態に即しながら、校長ビジョンの具現化にむけて、主任だけでなく全職員で教育活動に参画していけるよう共通理解を確実にやっていく。	特になし
	【業務改善】 効率的に業務を進めるための改善策を実施する。 (校務DXの推進)	教頭	【努力指標】 校務にICTを活用しながら、業務の平準化やワークライフバランス意識の向上に努め、協力・協働による効率的な業務遂行を図る。	【教師アンケート】 「学校運営において、ICTを効果的に活用し、業務の平準化やワークライフバランスを意識し、業務改善に努めている」と回答する教師の割合が A: 80%以上 B: 70%以上 C: 60%以上 D: 60%未満	A 100%	研究主任、GIGA推進教諭、生徒指導主事が連携をとって、タブレット端末を有効に活用する授業実践の土台を作ってきた。学校全体での授業実践を考え、授業実践を積み重ねてきた結果と考える。	校務DXの推進のために組織全体で効率的な業務推進につながる使い方を組織全体で学習し、理解を深めながら校務DXを進めていく。また、学校の実情に合わせた、校務DXを見極めながら、より利活用の積み重ね、業務の効率化を進める。	
2	【授業改善】 研究主題「自律した学び手の育成」の実現に向けて、授業力の向上を図る。	清川	【努力指標】 ①数学的な見方・考え方の明確化を図り、児童が見方・考え方を働かせるための手立てを講じるなど、わかった・できたを引き出すための手立てをとっている。 ②児童が学び方を選択したり、自分事となる課題の設定や学びを支える学習環境の整備をしたりするなど、熱く学ぶ姿を引き出すための手立てをとっている。	【教師アンケート・児童アンケート】 【教師アンケート】 ①「児童のわかった・できたを引き出すための手立てをとっている」②「熱く学ぶ姿を引き出すための手立てをとっている」と肯定的に回答する教師の割合が、 A: 80%以上 B: 70%以上 C: 60%以上 D: 60%未満 【児童アンケート】 ①「算数の授業中、習ったことが使えないか、どのようにしたら解けるのかを考え、問題に取り組むことができた」、②「わくわく学習の時間に自分の力や友達と協力して問題を解くことができた」と肯定的に回答する児童の割合が、 A: 80%以上 B: 70%以上 C: 60%以上 D: 60%未満	【教師】 A 100% 【児童】 A 93.6%	①教師アンケートは100%でA評価であった。月2回の授業準備の時間を確保し、各担任の先生方がめざす児童像に向けた重点①と②を意識した授業づくりに真摯に向き合った結果であると思う。授業で児童の自律した姿が増えるような工夫や展開を考え、授業実践を積み重ねてきた結果と考える。 ②児童アンケートは93.6%でA評価であった。先生方の授業づくりの工夫が児童のアンケート結果に結びついたと考える。また、児童の学びに向かう姿が前向きなものになり、学ぼうとする雰囲気が浸透してきたといえる。児童がわくわく学習等や自分一人でもまたはクラスメイトと共に課題に取り組む、達成感や成就感を味わった経験があったからその結果といえる。	①児童において学校生活の主は授業であることから、授業者は授業の充実を念頭に置き、継続して授業づくりの取組を行う。今年度、本校が目標に掲げている児童の姿に児童自身が近づいていけるように引き続き、授業準備や授業実践を積み重ねていく。授業においての児童の前向きな姿を価値づけていく。 ②児童が自分たちで学び方を選択し、課題を解決していく経験を増やす。児童自身が自分達の学び方の4つの力につながることを授業の終盤の振り返り等でも振り返り、自分達の学びを客観的に捉えて次に生かす経験を積み重ねていく。	「文章を読みとる力(読解力)の向上について」 ・読書活動を工夫することで児童の読解力向上に繋げられないか。
	【デジタル学習基盤の構築】 ねらい達成のためにICTを効果的に活用した授業構想を立て、実践を進める。	谷	【努力指標】 ICTをねらい達成に向けて子どもが主体的に端末を活用できる授業構想を立て、実践を進めるように努めている。	【教師アンケート】 「ねらい達成に向けてICTを使った授業を行っている」と肯定的に回答する教師の割合が A: 80%以上 B: 70%以上 C: 60%以上 D: 60%未満	A 100%	学習基盤構築のためのICT活用が100パーセントと高い評価であった。「オクリンクプラス」や「クラウド」など職員間で実践共有したり、ICTサポーターの方と連携し、児童の「わかった」「熱く学べた」を支える効率的な使用ができたと思う。また「ナビマ」などの問題をたくさんくり返し練習できた。	100パーセントだが、職員間の差や、他校との活用之差は見られる。活用できるところを全職員で共通理解し、もっと積極的に活用していきたい。	・以前は以下のような取り組みも行われていたが、今の児童には難しいか。 ①1冊の本をクラス内で順番に読み、自分の言葉で感想を言いかう活動
	【学力の向上①】 読書と家庭学習の往還、AIドリルや定期検定を活用して、基礎学力の定着を図る。	永吉	【成果指標】 単元末テストの平均(国語:読み取り(思・判・表) 算数:基礎基本(知・技))で (低学年)85点以上 (高学年)80点以上 達成した児童の割合が8割以上を目指す。	【各種教育データ】 単元末テスト(国語:読み取り(思・判・表) 算数:基礎基本(知・技))で低学年85点、高学年80点以上達成した児童の割合が、 A: 80%以上 B: 70%以上 C: 60%以上 D: 60%未満	【国語】 68.5% 【算数】 76% 【全体】 72.2% B	(国語) 目標得点を達成した児童が80%を超えたのは1学年のみだった。文章を適切に読み取って解答することに大きな課題がある。 (算数) 80%を超える児童が目標得点を達成できた学年もあったが、学年によっては難しい実態もあった。授業と家庭学習の往還で、今後も基礎基本の定着に努めていく必要がある。	(国語) 根拠となる叙述や言葉に印をつけて文章を読み取る ・全学年共通の読みとりワークをやり切る ・新単元に入る前に、教師が評価問題を確認し、授業の中で問題が解ける力をつける。 (算数) ・学校研究に沿った授業改善を進めていき、子どもに委ねた後は適用問題等で児童の見取りを確実にやっていく。	・大人でも本を読む機会が減っている。学校は児童が読書に親しむきっかけづくりができるとよい。
	【学力の向上②】 読書活動を充実させ、読書の質の向上を図る。	南・野上	【成果指標】 各学年のおすすめ10冊を1年間で読むことができる。	【各種教育データ】 「おすすめ10冊」の集約したデータを前期、後期に集め、検証する。(達成率) 前期…5冊以上 後期…10冊以上達成した児童の割合が、それぞれ A: 80%以上 B: 70%以上 C: 60%以上 D: 60%未満	1年 84.6% 2年100% 3年87.5% 4年88% 5年92.6% 6年25.8% 【全体】 B 79.3%	学校全体で教師や委員会からの頻繁な声掛けがあったため、借りている児童が多かった。6月後半から行った七夕読書祭りの取り組みで委員会のイベントを同時に行ったことにより図書館へ来る児童が前年度より増えたと考えられる。 6年生は行事があったり教室が離れていたりするため、本を借りにくる時間をとることが難しくなったように感じる。	委員会や読み聞かせなどの常時的な取り組みでおすすめの本を絡める取り組みを多くする。図書室に来る機会を増やすような取り組み(週に1回学級で図書館を利用する、行事の取り組みなど)を行う。 高学年は内容が難しくなり、手に取ることに抵抗を持つ児童もいるため、移動図書などを行い、本を読みやすい環境づくりを行う。	・朝の読み聞かせも児童は楽しみにしてきているが、高学年にとって10分間で読めるような絵本では満足してもえているのか疑問。

3	豊かな心の育成	【児童会活動の充実】 児童主体の児童会活動を通して、主体的実践的な態度を育成する。	深田・谷	【成果指標】 児童が児童会活動に積極的に参加し、児童会目標を達成しようとしている。 (児童会活動とは、各行事、委員会の取組、たてわり活動など)	【教師アンケート・児童アンケート】 【教師アンケート】 「児童が主体的に児童会活動に取り組めるように働きかけた。」と肯定的に回答する教師の割合が A: 90%以上 B: 80%以上 C: 70%以上 D: 70%未満 【児童アンケート】1～4年「児童会活動の取組に前向きにさんかできた。」5・6年「まわりのことを考えて行動し、みんなで協力してねばり強くがんばれた」と肯定的に回答する児童の割合が A: 90%以上 B: 80%以上 C: 70%以上 D: 70%未満	【教師】 A 100% 【児童】 B 87.2%	教師アンケートと児童アンケートに大きな差があった。教師からの働きかけは十分であった。児童にとっては児童会目標が複数あり、達成することが難しかったようだ。	後期の活動を考える際には、児童会目標の特にどこに焦点を当てるのかを考え活動企画、実行するようサポートをする。また児童が参加したり、振り返りをしたりする際にも、児童会目標の特にどの部分を目標にしているのかを全校で共通理解してから行うように声掛けをし「活動に参加できた!」「目標を達成できた!」と達成感をもてるようにする。来年度児童会目標を考えるときは、児童の思いを大切にしながらも、全校児童が分かりやすいような簡潔な目標になるようにサポートする。	特になし
		【道徳授業の工夫】 道徳の指導法を工夫することで道徳的価値の理解を深め、実生活へ生かそうとする態度を育てる。	深田	【満足度指数】 児童の振り返りに、目指す姿に向けた変化が見られる。	【教師アンケート・児童アンケート】 【教師アンケート】 「道徳的価値を自分ごととして考え深められるような手立てや工夫を行うことができた」とする教師の割合が A: 80%以上 B: 70%以上 C: 60%以上 D: 60%未満 【児童アンケート】 「道徳の授業の中で自分ごととして考えることができた」と肯定的な回答する児童の割合が A: 80%以上 B: 70%以上 C: 60%以上 D: 60%未満	【教師】 A 100% 【児童】 A 90.4%	◎教職員は、自分事として考えられるような授業展開及び終末の指導を心がけ、工夫していることがうかがえる。 ・ほとんどの児童が、どのような資料でも自分事としてとらえている。	今後も引き続き児童が自分事として道徳的価値を理解できるような授業展開及び終末の工夫を行っていく。	
		【校内支援体制の充実】 いじめ・不登校の未然防止のための校内支援体制や教育相談、児童理解の会を充実させ、専門組織との連携に努める。	竹内・中野	【努力指標】 情報交換を密にし、担任や各主任が連携・協働し、諸課題の未然防止・早期解決に努める。	【教師アンケート】 「情報交換を密にするため、月に一回程度児童理解の会を設け、諸課題の未然防止・早期解決に努めている」と肯定的に回答した教師が、 A: 90% B: 80% C: 70% D: 70%未満	【教師】 A 100%	教員アンケートの結果から、全ての教員が情報交換の重要性を理解し、児童理解の会を評価していることが明らかになった。しかし、具体的な課題解決にまで繋がっているかは不透明である。単なる情報共有で終わらせず、個別の支援計画や会議を通じて具体的な手立てを練ることが今後の課題となる。教員一人ひとりが「自分事」として関わる体制を整える必要がある。	個別の支援計画を持つ児童については、4～5月に支援会議を必ず開催し、全職員が連携して対応にあたる。また、軽微な課題を抱える児童についても、夏に支援会議を設け、具体的な役割分担を明確にする。これにより、情報共有で終わらせず、学校全体で課題解決に取り組み体制を強化する。さらに、保護者との連携を密にし、家庭での課題にも共感的に受け止め対応に当たる。	
4	健やかな身体の育成	【体力向上の工夫】 体力アップ1校1プランの取組等を推進し、体力の向上を図る。	北川	【成果指標】 運動能力テストなどの機会を利用し、3年生以上の4クラスで上体起こしの記録を取る。そして、12月に再び4クラスで上体起こしの記録を取る。その記録が各学年と2回以上伸びるようにする。	【各種教育データ】 上体起こしの伸びが2回以上になった学年が A: 4学年 B: 3学年 C: 2学年 D: 1学年以下	実践中	運動能力テストなどの機会を利用して3年生以上の4クラスで上体起こしの記録を取った。平均は、3年生17.5回、4年生18.4回、5年生15.6回、6年生17.8回だった。	2学期の体育などの中で、工夫して取り組み、上体起こしの伸びが平均で2回以上になるようにしたい。	特になし
		【生活習慣の確立】 基本的な生活習慣の確立とメディア利用も含めたデジタルシティズンシップ教育の推進に努める。	木戸口	【成果指標】 「よいねむり(寝起きが良い・寝つきが良い・中途覚醒がない)」ができていない児童の割合を80%以上にする。	【生活アンケート】 「よいねむり」ができていない児童の割合が A: 80%以上 B: 70%以上 C: 70%以上 D: 60%未満 【保護者アンケート】 8時間以上の睡眠時間(低:9時間、高:8時間)を週に4日以上とることを心がけていると回答する保護者の割合が A: 90%以上 B: 80%以上 C: 70%以上 D: 70%未満	【アンケート】 A 82.9% 【保護者】 B 86.7%	3～6年児童対象の生活アンケートの結果、よいねむり(寝起きが良い・寝つきが良い・中途覚醒がない)ができていない児童は82.9%だった。就寝時刻、起床時刻、睡眠時間については、目標をクリアしている児童が8割前後いるが、デジタル機器の利用については、2時間より長い児童が平日51%、休日76%おり、休日は1日中利用している児童もいる。保護者からは、「大人が使っていると子供も使いたがる」「大人向けの取組もあると良い」という声もあり、保護者も問題意識を持っていることがわかった。	・夏休み最終週に、「生活習慣見直しシート」の取組を行い、家庭でデジタル機器利用のルールの見直しと実行、振り返りを行う。 ・2学期のアンケートでは、休憩時間、連続使用時間、家庭のルールや気をつけていること等について調査し、結果をばけんだよりで知らせる。 ・2月の学校保健委員会で、デジタル・シティズンシップについて児童・保護者に啓発する。	
5	家庭・地域との連携	【ふるさと教育の推進】 ふるさとのことを知り、ふるさと愛を育む『ふるさと教育』を推進する。	教頭	【努力指標】 地域教材人材等地域の特色を生かして、学校運営協議会と連携しながら、ふるさと教育の推進に努める。	【教師アンケート】 「地域教材人材等地域の特色を生かした教育活動を行った」と回答する教師の割合が A: 90%以上 B: 80%以上 C: 70%以上 D: 70%未満 【児童アンケート】 「生活科・総合や地域の方との学習を通してふるさとが好きだ」と回答する児童の割合が A: 90%以上 B: 80%以上 C: 70%以上 D: 70%未満	【教師】 A 100% 【児童】 A 96.2%	前期は、全校で虚空蔵山ウオークラリー、ふれあい活動(高学年)で竹細工、国造太鼓、ゴルフ場体験など地域の自然や伝統などを生かした取り組みができた。そのほかにもクラブ活動や読み聞かせなど学校運営協議会や地域、保護者の方を巻き込んで充実した活動になっている。児童の満足度も高く、和気校下の良さに気づける貴重な機会になっている。	後期は、低学年のふれあい活動が計画されている。地域の方に講師になっていただいているが、内容の見直しとともに、講師の選定が難しくなっている。CSや学校運営協議会と話し合いながら持続可能な活動を探っていきたい。	特になし
		【家庭との連携】 家庭と連携し、よりよい生活習慣の確立や家庭学習の習慣化を図る。	永吉	【努力指標】 児童が継続的に家庭学習に取り組んでいる。	【児童アンケート・保護者アンケート】 【児童アンケート】 「毎日の宿題を家でするようにしている」と肯定的に回答する児童の割合が A: 90%以上 B: 70%以上 C: 60%以上 D: 60%未満 【保護者アンケート】 「子どもは家(学童)で家庭学習(宿題)」に取り組んでいる」と肯定的に回答する保護者の割合が A: 80%以上 B: 70%以上 C: 60%以上 D: 60%未満	【児童】 A 91.7% 【保護者】 A 91.1%	児童・保護者アンケートともに肯定的な回答が9割以上だった。日常的に宿題を出すことで、家庭学習の習慣化には繋がっていることが窺えた。しかし、実際には家庭学習が習慣化していない児童もあり、そうした児童への働きかけも必要である。	・学力向上に繋がる宿題の内容、量の検討 ・家庭学習が習慣化していない児童への声かけ	